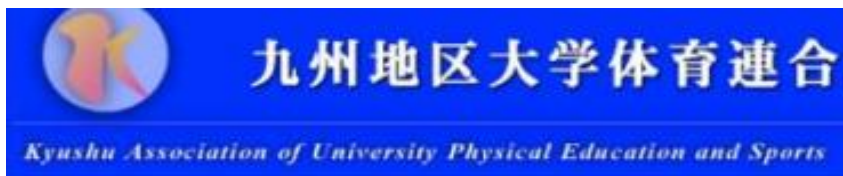
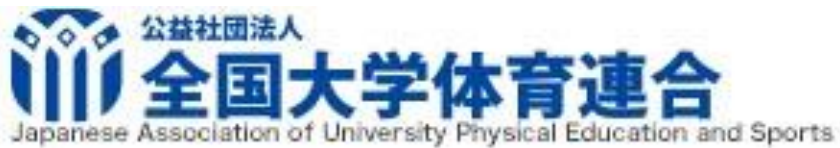


発表プログラム・抄録集



The 11th Research Forum of Physical Education and Sports for Higher Education, 2023
Kyusyu Association of University Physical Education and Sports, 2023

第11回大学体育スポーツ研究フォーラム 令和4年度春期研修会「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」

会期:2023年3月13日(月)・14(火)

会場:九州産業大学, オンライン(ハイフレックス方式)



KSU

九州産業大学

KYUSHU SANGYO UNIVERSITY

第 11 回大学体育スポーツ研究フォーラム

2022（令和 4）年度春期研修会

「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」

目 次

目次	1
主催，期日，会場，実施内容	2
フォーラム・研修会組織	3
大体連常務理事／研究部長，運営委員長挨拶	4
フォーラム・研修会日程	6
会場への交通案内	8
会場案内	9
参加者へのお知らせ	10
発表者へのお知らせ	11
大学体育優秀論文賞受賞講演	12
フォーラム主催企画	14
九州支部・九体連主催企画	17
一般発表プログラム	25
一般発表抄録（研究報告・事例報告）	27
「大学体育スポーツ学研究」投稿規定	37
「大学体育スポーツ学研究」投稿時チェックリスト	40

主催，期日，会場，実施内容

【主 催】

公益社団法人全国大学体育連合（大体連）
九州地区大学体育連合（九体連）

【期 日】

2023年3月13日（月）9：50～15：50
2023年3月14日（火）9：00～15：05

【会 場】

九州産業大学（福岡市東区松香台 2-3-1），
オンライン（ハイフレックス方式で開催）

【実施内容】

- ・大学体育優秀論文賞受賞講演
- ・フォーラム主催企画（大体連創立 70 周年記念企画）
- ・九州支部・九州地区大学体育連合主催企画
- ・一般発表「大学体育スポーツに関する研究報告・事例報告」

フォーラム・研修会組織

【運営委員会組織】

全国大学体育連合常務理事／研究部長 木内 敦詞（筑波大学）

運営委員

委員長 田原 亮二（西南学院大学）

副委員長 中山 正剛（スポーツ庁）

委員 藤野 和樹（千葉商科大学）

委員 梶田 和宏（京都先端科学大学）

実行委員

委員長 藤井 雅人（福岡大学）

委員 斉藤 篤司（九州大学）

委員 村上 清秀（尚絅大学）

委員 高橋 浩二（長崎大学）

委員 磯貝 浩久，熊谷 賢哉，深田 忠徳，
秋山 大輔，増村 雅尚（九州産業大学）

大体連常務理事／研究部長，運営委員長挨拶

全国大学体育連合 常務理事／研究部長

木内 敦詞（筑波大学・教授）



第 11 回目のフォーラムを大学体育授業の実践研究が盛んな九州の地で，九州地区の皆さまと合同で開催できることを，心より嬉しく思います。第 9 および 10 回フォーラムのオンライン開催から，今回は現地の対面とオンラインのハイフレックス形式での開催です。九体連会長の藤井雅人先生，会場を提供いただいた九州産業大学の磯貝浩久先生をはじめ，九州地区の先生方のご協力に，厚くお礼申し上げます。大学体育教員の FD を支える学術活動の両輪として，本フォーラムと論文誌「大学体育スポーツ学研究」が機能し，それが全国の大学の体育授業や運動部活動の優れた実践に繋がることを願っています。

全国大学体育連合 研究部副部長（大学体育スポーツ研究フォーラム運営委員長）

田原 亮二（西南学院大学・准教授）



第 11 回大学体育スポーツ研究フォーラムは，沖縄県で開催された第 5 回以来，2 度目の九州支部の春期研修会との合同開催となります。また，今回は新潟医療福祉大学で行われた第 8 回以来の対面方式での開催となります。対面開催から遠のいていた理由は言うまでもありませんが，オンライン開催によってもたらされた利点も残しつつ，現地でもオンラインでも参加可能なハイフレックス方式で開催することとなりました。

今回は全国大学体育連合創立 70 周年を記念したシンポジウム「これまでの大体連と九体連の研究活動をふり返る－学生，大学，教員にとって魅力的な大学体育の再考－」が企画されています。過日，発刊された 70 周年誌にて安西会長が記されていたように，時代が大きく変わりつつある今，大体連，大学体育も大きな変わり目に直面していることは参加者のみなさまもひしひしと感じられていることと思います。大学体育の授業研究が盛んな九州の地を中心に，大学体育に関わるみなさまによって，これからの大体連，大学体育について活発な意見交換がなされることを期待しています。

全国大学体育連合 九州支部／支部長（九州地区大学体育連合会長）

藤井 雅人（福岡大学・教授）



この度、福岡県の九州産業大学において、2022（令和4）年度 九州地区大学体育連合／全国大学体育連合九州支部春期研修会を、第11回大学体育スポーツ研究フォーラムと合同開催させていただくことになりました。九体連／九州支部は、今回の合同開催において、大体連と九体連の研究活動をふり返り、今一度魅力的な大学体育を再考するという全国大学体育連合創立70周年記念企画のシンポジウムを受けて、「これからの大学体育・スポーツー体育授業必修化の回帰を目指してー」と題するより未来志向のシンポジウムを企画することにしました。大学体育の授業研究の伝統が息づく九州の地から、大学体育授業の選択化の流れに歯止めをかけ、必修化への回帰を目指すムーブメントを起こそうという非常に大胆な企画です。大学教育が急激かつ大きく変化し、その中で大学体育が果たすべき役割も多様化してきている今、両シンポジウムのように大学体育、特に体育授業の存在意義やそのあり方についてより深く議論することが重要になっています。今回の合同開催が、大学体育に関心を有するみなさまにとって、今後の大学体育のより良い実践につながる議論の場となれば幸いです。

フォーラム・研修会日程

期日：2023年3月13日（月）9：50～15：50，3月14日（火）9：00～15：05

会場：九州産業大学（福岡市東区松香台2-3-1），3号館3階3306A・3306B

オンライン（ハイフレックス方式で開催）

3月13日（月）

時間	プログラム
9:20～	受付
9:45～9:50	諸注意，事前説明 運営副委員長 中山 正剛（スポーツ庁）
9:50～10:00	開会式・挨拶 研究部長 木内 敦詞（筑波大学） 実行委員長 藤井 雅人（福岡大学）
10:00～10:30	大学体育優秀論文賞受賞講演 講師：寺岡 英晋（日本体育大学）
10:35～12:00	フォーラム主催企画シンポジウム （公益社団法人全国大学体育連合創立70周年記念企画） 『これまでの大体連と九体連の研究活動を振り返る —学生，大学，教員にとって魅力的な大学体育の再考—』 講師：西田 順一（近畿大学） 講師：田原 亮二（西南学院大学） 講師：磯貝 浩久（九州産業大学） 講師：中山 正剛（全国大学体育連合研究部） 司会：木内 敦詞（筑波大学） 指定討論者：村山 光義（慶應義塾大学）
12:00～13:00	昼休憩
13:00～15:50	一般発表：8演題（研究報告7演題，事例報告1演題） 発表時間：1演題17分（発表12分，質疑応答5分）
13:00～14:17	研究1-3・事例1 座長：森 誠護（九州共立大学）
14:30～15:47	研究4-7 座長：綾部 誠也（岡山県立大学）
16:05～17:35	九州地区大学体育連合理事会

3月14日(火)

時 間	プログラム
9:00～10:30	※前日に受付をお済みでない方のみ、受付へお越しください。 九州支部・九体連主催企画シンポジウム 『これからの大学体育・スポーツ —体育授業必修化への回帰を目指して—』 講師：橋本 公雄（九州大学名誉教授，元熊本学園大学） 講師：藤原 大樹（崇城大学） 司会：藤井 雅人（福岡大学）
10:40～11:45	一般発表：3 演題（研究報告 1 演題，事例報告 2 演題） 発表時間：1 演題 17 分（発表 12 分，質疑応答 5 分）
10:40～11:37	事例 2-3・研究 8 座長：森村 和浩（就実大学）
11:45～12:45	昼休憩
12:45～15:00	一般発表：6 演題（研究報告 3 演題，事例報告 3 演題） 発表時間：1 演題 17 分（発表 12 分，質疑応答 5 分）
12:45～13:42	研究 9-11 座長：堀田 亮（近畿大学九州短期大学）
13:55～14:52	事例 4-6 座長：深田 忠徳（九州産業大学）
14:55～15:05	閉会式 運営委員長 田原 亮二（西南学院大学） 編集委員長 西田 順一（近畿大学）
15:15～16:15	九州地区大学体育連合総会

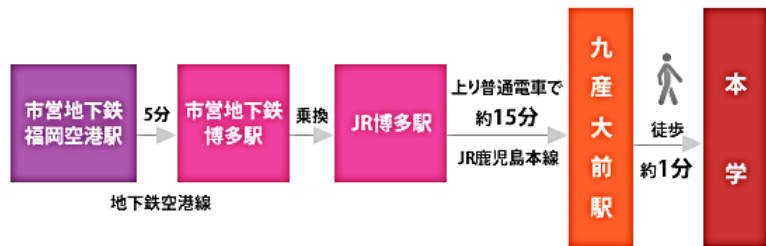
会場への交通案内

【九州産業大学へのアクセス】

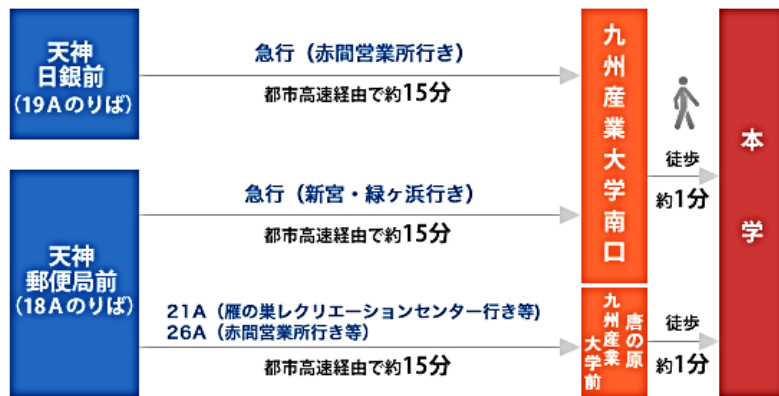
1) 電車（JR 鹿児島本線）をご利用の場合



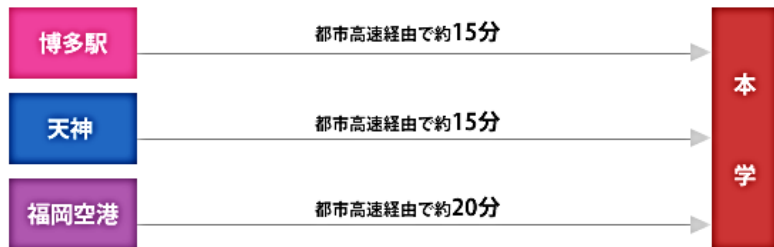
2) 飛行機（福岡空港）をご利用の場合



3) 路線バス（西鉄バス）をご利用の場合



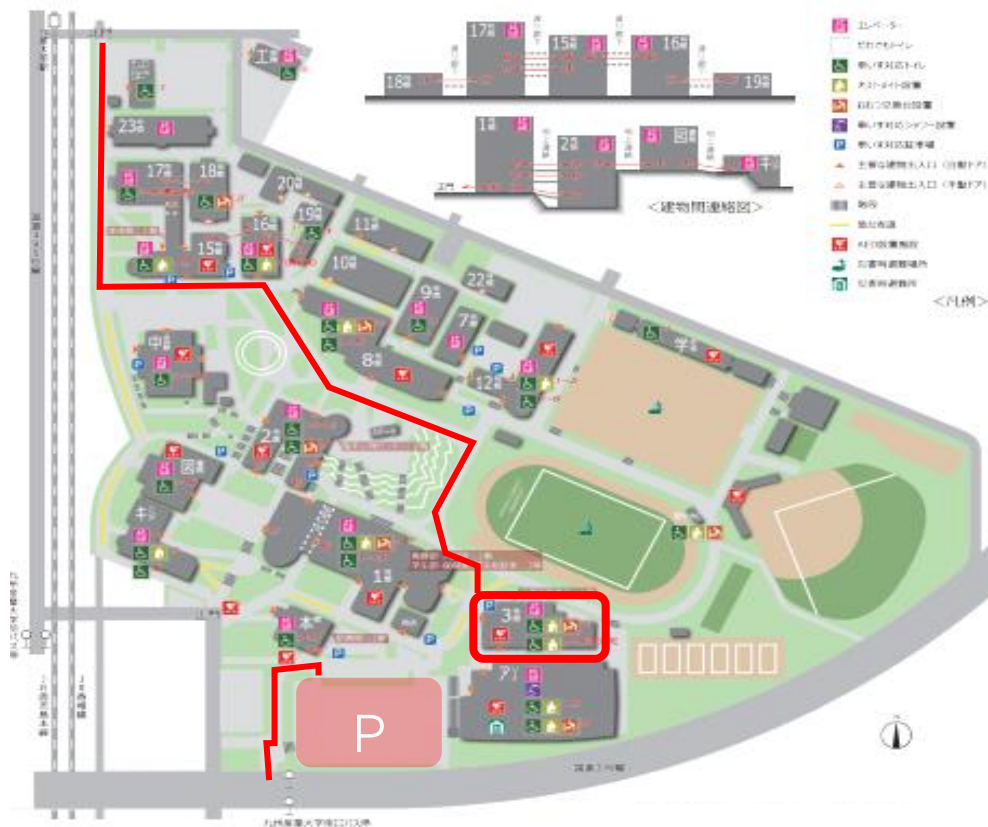
4) お車・タクシーをご利用の場合



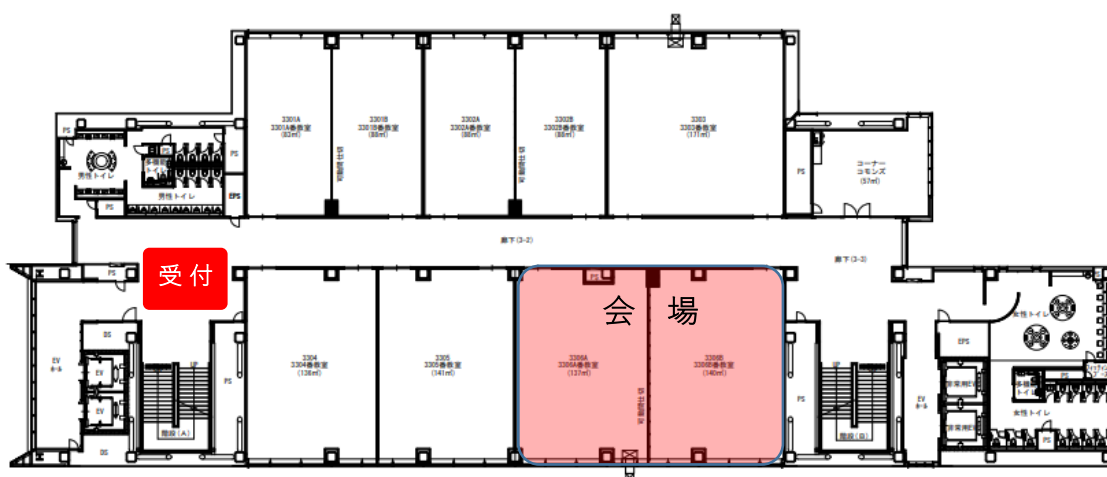
会場案内

【九州産業大学キャンパス案内図】

※本フォーラム・研修会は、すべて3号館で実施いたします。



【3号館3階マップ】



※3号館3階のエレベーターを降りて、会場に向かう途中に受付を設けています。

※会場は、3306A・3306Bを使用いたします(連結)。

参加者へのお知らせ

1. 参加方法

本フォーラムは会場またはオンラインでの参加が選択可能です。オンラインでの参加申し込みをしていただいた方には Zoom の URL を送信いたします。発表プログラム・抄録集につきましては、参加者全員にメール送信いたします。なお、発表プログラム・抄録集は3月10日（金）配信予定です。

2. 参加費

参加費は以下のようになっております。

発表あり（筆頭発表者のみ）

機関会員・個人会員・大学院生：1,000 円（機関会員かつ個人会員は無料）

非会員：3,000 円

発表なし（共同発表者含む）

機関会員・個人会員・大学院生：無料

非会員（オンライン参加）：無料

非会員（現地参加）：3,000 円

【振込先】 納入先にご注意ください。

大体連

常陽銀行 0130

研究学園都市支店 104 普 3976640 公益社団法人全国大学体育連合研究部

九体連

ゆうちょ銀行

【記号】17300 【番号】20857851 【加入者名】九州地区大学体育連合

ゆうちょ銀行以外

【店名】七三八 【店番】738 【預金種目】普通 【口座番号】2085785

※ 大会期間中の昼食時は、会場近くの学内食堂が営業される予定です。

※ 会場駐車場は 30 台程度利用可能です。利用申請手続き等につきましては、後日 HP などでお知らせします（駐車台数に限りがありますので、可能な限り公共交通機関での来場をよろしくお願ひします）。

発表者へのお知らせ

研究報告・事例報告

【発表形式】

1. 発表方法は、プレゼンテーションソフト（PowerPoint等）を使用した口頭発表です。
2. 各演題につき、発表 12 分，質疑応答 5 分の計 17 分間です。10 分，12 分，17 分に合図をします。発表時間の厳守をお願いいたします。
3. 質疑応答はすべて口頭にて行います。
4. 発表において使用する言語は、日本語に限定させていただきます。
5. 優れた内容の発表は『大学体育スポーツ研究フォーラム優秀発表賞』（大体連），『優秀発表賞』（九体連）として表彰いたします。審査はそれぞれ独立した審査委員会にて実施いたします。重複してエントリーすることはできません。
6. 発表に関して不明な点は、お気軽にお問い合わせください。
お問い合わせ先は、担当の中山正剛・梶田和宏（11th.forum.2023@gmail.com）まで。

【現地での発表者】

1. 進行をスムーズに行うため、発表の際は会場備え付け PC（Windows 11 ver.22H2 Office 2019 ver.1808）をご使用いただきます。なお、会場備え付け PC にて正常に投影されない場合のみ、ご自身の PC を使用いただけます（特に Mac ユーザーの方は、ご自身の PC をご準備いただいた方がいいと思われます）。
2. プロジェクターへの接続は RGB 端子と HDMI 端子となっております。変換アダプタが必要な場合は各自でご用意ください。
3. 発表者は USB メモリーをご持参いただき、原則初日の受付の際に参加および一般発表の受付を行い、会場 PC へ発表用ファイルのコピーを完了させてください。ファイル名は、「演題番号・氏名」（例えば、「研究-1・九州太郎」など）としてください。
4. 発表プログラム・抄録集とは別に資料を配布される方は、50 部程度ご用意ください。

【オンラインでの発表者】

1. 発表時に回線トラブルなどが発生してしまった場合でも、原則として時間通りに進めさせていただきます。オンラインで発表される方は、回線速度がより安定している場所からの接続をお願いいたします。
2. Zoom での発表の際は、入室から質疑応答が終わるまでカメラをオンにして、ミュートを解除した状態で参加してください。


受賞講演

『大学体育優秀論文賞受賞講演』 「大学体育スポーツ学研究（第19巻）」優秀論文賞

3月13日（月）10:00～10:30

《タイトル・演者》

新型コロナウイルス感染症拡大下における大学生のメンタルヘルスと社会的スキルに関する調査研究：対面授業による体育実技の履修有無の比較から
寺岡 英晋（日本体育大学）

研究ノート 

大学体育スポーツ学研究
©2022 全国大学体育連合 <https://database.nsgp/>

新型コロナウイルス感染症拡大下における大学生のメンタルヘルスと社会的スキルに関する調査研究： 対面授業による体育実技の履修有無の比較から

寺岡英晋, 村山光義, 佐々木玲子, 稲見崇孝, 東原綾子,
野口和行, 加藤幸司, 永田直也, 福士徳文
慶應義塾大学体育研究所

要 旨
大学体育実技授業は、対面授業による実施を前提に心身の健康の維持・改善に寄与してきた。しかし、新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響により、2020年度春学期（前期）に多くの大学で対面授業による体育実技が実施不可となり、その授業形態を遠隔授業に変更し、大学によっては休講を決定した。このような極めて特殊な状況下において、特に大学生のメンタルヘルスや社会的スキルへの否定的な影響が懸念されていた中、筆者らの所属する大学（以下本学）では、2020年度秋学期（後期）に体育実技を対面授業で再開するに際し、これらの要素に対する体育実技の肯定的な教育的効果が期待された。そこで、本研究では、対面授業による体育実技の履修が大学生のメンタルヘルスの向上および社会的スキルの育成に与える影響を検証することを目的とした。対象者は本学の学生455名（男性230名、女性225名）であった。体育実技授業を履修した者は316名（履修者群）、履修していなかった者は139名（非履修者群）であった。調査は2020年度秋学期授業期間の前後で Web アンケートによって実施した。Web アンケートは対象者の属性、精神的健康状態表（WHO-5）、社会的スキル尺度（KISS-18）から構成した。結果は以下の通りである。（1）二要因分散分析の結果、WHO-5と KISS-18において履修要因と時間要因で有意な交互作用が認められた。また、WHO-5は履修者群で向上、KISS-18では非履修者群で低下の傾向が示された。（2）課外活動への所属有無を踏まえた検討では、KISS-18の得点について有意な交互作用が認められた。特に、課外活動に所属している非履修者群において、受講後の得点が受講前の KISS-18の得点に比べて有意に低かった。（3）履修種目を踏まえた検討では、WHO-5と KISS-18において有意な交互作用が認められなかった。結論として、体育実技の履修が授業期間前後においてメンタルヘルスの向上、および社会的スキルの維持に寄与したことが示された。とりわけ、その維持・促進要因として課外活動への所属有無や履修種目の違いは関連が小さく、体育実技への参加が最も影響を与えている要因のひとつである可能性が示された。

キーワード
大学生、対面授業、メンタルヘルス、社会的スキル

「大学体育スポーツ学研究（第19巻）」優秀論文賞 選考経過および講評

I. 選考経過

1. 選考対象となる論文

2022年3月に発刊された「大学体育スポーツ学研究（第19巻）」に掲載された11編のうち、寄稿論文1編および過去の優秀論文賞筆頭受賞者による筆頭論文1編を除く9編（総説1編，研究ノート8編）の論文を選考対象とした。

2. 選考委員（敬称略）

第1次選考委員：西田順一，難波秀行，園部豊，木内敦詞，梶田和宏，小林雄志，佐藤和，高田大輔，田原亮二，中田征克，中山正剛，西垣景太，平工志穂，藤野和樹，山本浩二（以上，本誌編集委員）
第2次選考委員：木内敦詞（委員長），西田順一（幹事），内田若希，小倉圭，高田義弘，村上貴聡

3. 選考結果

第1次選考では，本誌編集委員全員より優秀論文賞に相応しい2編の推薦がなされ，そのうち推薦数の多かった上位2編を第2次選考の対象とした．第2次選考では選考委員が2編に対して量的・質的評定を行った．その結果に基づき，最終的に以下を受賞論文として本連合常務理事会へ上申し，承認された．

受賞論文名

新型コロナウイルス感染症拡大下における大学生のメンタルヘルスと社会的スキルに関する調査研究：対面授業による体育実技の履修の有無の比較から

著者：寺岡英晋，村山光義，佐々木玲子，稲見崇孝，東原綾子，野口和行，加藤幸司，永田直也，福士徳文

掲載：大学体育スポーツ学研究，19：84-93，2022年3月

II. 講評

コロナ禍以前は一般に，大学体育実技授業は対面実施によって学生の心身の健康の維持増進に寄与してきた．コロナ禍で通常の対面授業が制約される中，いかにして体育授業を運営したか，また履修者のメンタルヘルスや社会的スキルにいかなる影響を及ぼしたのかについて，著者の所属する大学の学生を対象に，体育履修者と非履修者で比較検討したのが本研究である．

コロナ1年目の2020年4月の段階で，春学期の体育授業を全面休講とすることを決め，秋学期のみ開講したところ，選択科目として開講している体育実技の履修登録数はコロナ前の1.17倍に増加したという．感染対策を講じ，用具や参加人数を制限しながらの授業運営を強いられるなか，学生間のコミュニケーションの促進を重要課題として位置づけながら，各教員の裁量のもと，授業が展開された．10月上旬と12月下旬の2回にわたるwebアンケート調査から，以下の結果が得られた．二要因分散分析の結果，体育実技履修者は非履修者と比較して，受講期間の前後におけるメンタルヘルスの向上と社会的スキルの維持が明らかとなった．課外活動への所属の有無や履修種目の違いといった交絡要因を踏まえた解析も行われている点からも，適切な調査設計がなされているといえる．また，課外活動への参加や履修科目の違いよりも，体育実技への参加の重要性を裏づけた貴重な研究である．

本研究は，コロナ禍への対応としての実践にとどまらず，ポストコロナ社会における大学体育授業の新たな可能性を検討する上で有用な，体育授業の実践に寄与する事例と成果を具体的に提示している．よって，本誌第19巻における優秀論文賞に選定した．

以上

シンポジウム①

フォーラム主催企画

(公益社団法人全国大学体育連合 創立 70 周年記念企画)

『これまでの大体連と九体連の研究活動を振り返る
—学生，大学，教員にとって魅力的な大学体育の再考—』

3月13日（月）10:35～12:00

《タイトル・演者》

大体連の論文誌を振り返って	西田 順一（近畿大学）
大体連のフォーラムを振り返って	田原 亮二（西南学院大学）
九体連の論文誌を振り返って	中山 正剛（大体連研究部）
九体連の研究集会を振り返って	磯貝 浩久（九州産業大学）

司 会：木内 敦詞（筑波大学）

指定討論者：村山 光義（慶應義塾大学）

【概要】 木内 敦詞（筑波大学）

2022年11月25日、公益社団法人全国大学体育連合（大体連）は創立70周年を迎えた。30年以上遡る1991年の大学設置基準大綱化を発端に、平成を通じた一連の大学改革は、大学体育の多くを選択化するなど、幾多の試練を与えた。しかしその荒波にもまれた大学体育をふり返ると、結果として教育の内容は確実に改善されたのではないか。また、その教育や指導の実践を研究対象とした研究フィールド「大学体育スポーツ学」も根づいてきたといえるのではないか。ここ九州は、大学体育の授業研究が古くから盛んである。この地で本シンポジウムを開催できることを心より嬉しく、そして楽しみにしている。

大体連の論文誌をふり返って 西田 順一（近畿大学）

本シンポでは大学体育教育に貢献し得る「大学体育スポーツ学研究」の来し方行く末を考える。全国大学体育連合の論文誌は、2004年に「大学体育学」として創刊され、その後、2019年には「大学体育スポーツ学研究」へと誌名変更された。本年、2023年には通算20巻の節目の発刊を迎える。全国大学体育連合70年の活動の歴史のわずかな歳月ながら、創刊に関わった方々や歴代編集委員長、編集委員等の尽力により、着実に教育研究論文誌が編纂されてきた。また何よりも本誌を投稿先として選択し論考を掲載した執筆者の貢献が大きい。筆者は、投稿者、編集委員、編集委員長として本誌に携わってきた。本報告では、「大学体育スポーツ学研究（「大学体育学」）」（以下、本誌）の発刊状況についてふり返りを行う。次に、本誌の抱える課題を整理した上で、今後の本誌発展のために求められる研究、また本誌の整備の方向性について報告する。以上より、本誌の更なる発展のための契機としたい。

大体連のフォーラムをふり返って 田原 亮二（西南学院大学）

「大学体育スポーツ研究フォーラム」が企画された経緯として、大体連では全国研修会や指導者養成研修会など講師が指導する形式の研修会を開催しているが、個々の先生方が大学体育の授業研究や大学スポーツに関して報告し、ディスカッションする場はほとんど提供されていなかった。そこで、大学体育、大学スポーツをフィールドとした実践研究を活性化させ、大学体育スポーツにおける教育の質を向上させることを目的としてフォーラムを開催する運びとなり、今日に至っている。第1回フォーラムから第10回フォーラムまでの延べ参加者は774名であり、一般発表の演題数は174演題となっている。また、一般発表における研究発表と事例報告の内訳は研究92演題、事例82演題となっており、開催目的にかなった傾向を示している。シンポジウムでは、大体連を支える活動の一つとしてフォーラムが果たすべき役割と、フォーラムが発展、拡大していくためのビジョンを参加者のみなさんとの議論を通して再確認できればと考えている。

九体連の論文誌をふり返って 中山 正剛（大体連研究部）

九体連では、1975（昭和 50）年に「九州の大学体育・スポーツ（全 25 巻）」が発刊され、それを引き継ぐ形で、2000（平成 12）年に「体育・スポーツ教育研究」（以下、本誌）が発刊された（現在は 22 巻まで発刊されている）。梶田ら（2018）は、大学における教養体育について悉皆調査をしており、その中で地区ごとの状況について述べているが、「最も活発に活動しているのは九州地区であろう。九州地区大学体育連合は 2000 年より、大学体育の FD に関する教育研究誌を独自に出版しているとともに、夏季には実技研修会、冬季には教育研究を中心とした研修会を精力的に行っている。」と言及している。本報告では、本誌の掲載状況をふり返りながら、筆者が、投稿者、査読者、編集委員、編集委員長として本誌に携わってきた経験をふまえ、いかにして活発な活動を続けているのかについて紹介する。一方で、本誌にも課題があることは事実であるため、その課題を整理し、今後の発展に向けた提案をする。

九体連の研究集会をふり返って 磯貝 浩久（九州産業大学）

本シンポでは、九体連の研究集会をふり返りながら、今後の九体連の活動を考える機会にしたい。九体連は、1974年に大学保健体育協議会から名称を変えて設立された。翌年に第 1 回研修会が大分県九重町にある「やまなみ荘」で開催され、1998年に「体育・スポーツ・研究に関する教育研究会議」と名称を変えながら、今日まで毎年開催されている。筆者は 1988 年から参加してきたが、その頃から、同じ宿に泊まり昼も夜も研修するということが基本となっている。研修会を振り返ると、大綱化への対応、九体競との連携、九州体育学会との連携、多様なプロジェクト研究の実施、授業研究の推進などが大きな成果としてあげられる。当日はこれらの詳細に関して時系列的にふり返りながら、成果と課題について報告したい。そして、大学を取り巻く現状を踏まえ、九体連の今後の方向性について提案したい。会場との議論を交えて、より魅力的な九体連のあり方を模索できればと思う。

シンポジウム②

九州支部・九州地区大学体育連合主催企画

『これからの大学体育・スポーツ
ー体育授業必修化への回帰を目指してー』

3月14日（火）9:00～10:30

《タイトル・演者》

挑戦的課題達成型テニス授業によるポジティブな徳性の向上効果

藤原 大樹（崇城大学）

挑戦的課題達成型バドミントン授業の教育成果および自己成長モデル

橋本 公雄（九州大学名誉教授，元熊本学園大学）

司会：藤井 雅人（福岡大学）

《企画趣旨》

藤井 雅人（福岡大学）

九州地区大学体育連合（九体連）／九州支部は、その歴史を振りかえってみると、全国大学体育連合の発展、そしてまた大学体育全体の質向上に寄与してきたといえる（橋本、2021）。その基盤にあったのは、2つの体育連合組織が主体的に関わる大学体育授業研究の成果であり、その伝統を受け継ぐ研究グループによる地道な授業研究への取り組みである。九体連／九州支部は、それらの研究の中心的な役割を担ってこられた橋本公雄氏（九州大学名誉教授、元熊本学園大学）に、研修会での講演や機関誌への寄稿（橋本、2021）を通して、これまで得られてきた授業研究成果への言及にとどまらず、そうした成果が具体的にどのように大学体育の発展につながってきたのか、そしてさらに今後どのように大学体育が展開され、それに各種大学体育連合組織がどのように関わっていくべきであるのかについてご教示いただいた。その中で我々にとってとりわけ興味深かったのは、橋本氏が長きにわたる授業実践・研究を経て開発された「挑戦的課題達成型体育授業」の実践とその教育効果であり、また各種大学体育連合組織の主導により各会員校にその授業実践と授業研究への取り組みを促すことが、大学体育授業の必修化への回帰につながるのではないかという橋本氏の主張であった。九体連／九州支部は、こうした橋本氏の取り組みを、各種大学体育連合組織が大学体育授業の選択化の流れに歯止めをかけ、必修化への回帰を目指すための1つの有力な方向性と位置づけるとともに、本シンポジウムにおいて全国の大学体育の質向上に関心を有する方々に紹介し、その有効性や改善点などについて議論できればと考えた。

以上のような企画趣旨に基づいて、本シンポジウムではまず、橋本氏にイントロダクションとして「大学体育連合のミッションと大学体育の必修化を主張しうる授業研究」と題し、特に大学体育授業の必修化への回帰に寄与しうる「挑戦的課題達成型体育授業」の実践とその授業研究の意義についてご報告いただく。次いで、そうした「大学体育必修化への回帰に向けての方略」について、橋本氏および藤原大樹氏（崇城大学）よりお話しいただく。具体的には、テニスとバドミントンをそれぞれ教材とした「挑戦的課題達成型体育授業」実践およびそこで得られる心理学的側面からの教育成果についてご報告いただく。さらには、そこまでの報告を踏まえて、橋本氏に各種大学体育連合組織が主導すべき「『運動』としての大学体育必修化への回帰の具体的提言」を行っていただく。

本シンポジウムが、大学体育の今後の発展に関心を有する方々にとって、様々な立場より情報・意見交換がなされ、大学体育の質向上に資する議論がなされる場となれば幸いである。

I. 大学体育連合のミッションと大学体育の必修化を主張しうる授業研究

橋本 公雄（九州大学名誉教授、元熊本学園大学）

全国大学体育連合（大体連と略す）は何のために設立されたのだろうか。それは大学体育（一般体育）を必修から外すという諸機関（中教審や学術会議など）からの外圧に対し、必修を守るために設立されたものである。しかし、1991年の大学設置基準の大綱化によって必修としての大学体育は瓦解し、現在全国の大学の半数以上で選択化されている。

今日の大学はユニバーサル化の時代に突入し、大学生の気質は従来とは大いに変貌し、18歳人口の減少による定員割れで経営に支障をきたしている大学も少なくはない。このような状況を鑑みるに、学生にキャンパスライフをエンjoyさせ大学の活性化を図るため

に、運動・スポーツの力を活用することは有効と考えられる。そのためには、大学体育の必修化や運動・スポーツの活性化を今一度主張し、スポーツ文化の醸成を促進していく必要がある。これをリードしていくのが大学体育連合（大体連・地方の体育連合）のミッションと考える。大学体育が選択化されると、大学体育連合からの退会へと繋がり、運営資金不足に陥ることから機関自体の弱体化は免れない。大学によっては大学体育の再必修化の動きもあり、カリキュラム改定は随時行われるので、大学体育の必修化への回帰のアクションを起こすべき時ではないだろうか。時は重要であり、時を見誤ると取り返しのつかないことになりかねない。

このような背景のもとに、初めに大体連および九州地区大学体育連合の活動を対比しながら歴史を振り返り、これからの大学体育授業研究のあり方、つまり大学当局に必修としての大学体育を説得しうる授業研究の課題設定のあり方を提案することにする。運動・スポーツ科学研究は質量ともに多大な発展を遂げてきたが、それらは一般教育のなかで大学体育を必修とする根拠にはなり得なかった。どうしたら必修として残せるのか、あるいは再必修化へもっていけるのか。それは大学執行部を説得・納得させ得るエビデンス（資料でも可）を蓄積していくことと考える。体育人が個々人の研究を推進しただけでは大学体育の必修化には繋がらないことは、今日の選択化の現状をみれば火を見るより明らかである。個々人の興味・関心あるいは専門領域での課題研究は個人研究であり、一般体育の必修化とは無関係なのである。よって、必修としての大学体育を存続・回帰させるには、一般教育の理念、教育目標、私学における建学の精神などにマッチした研究課題が必要であると考える次第である。しかも、「楽しませる授業」から脱皮し、「鍛える授業」への発想の転換を図り、自己成長を促す「挑戦的課題達成型体育授業」を提案する。

挑戦的課題達成型体育授業とは、「体育実技授業において挑戦的な目標を自己設定し、その目標を達成させる授業（橋本, 2021）」ということであり、単なる運動・スポーツを楽しませるのではなく、自己の限界に挑戦させ自己成長を促す体育授業となる。これは、自己成長を促す授業プログラムづくりの要素として、根上（2012）が提唱した「魅力」「価値」「挑戦・冒険」からなる三元論的相互干渉モデルに依拠している（図 1）。このモデルは、楽しい体育論の延長線上にある学生にとっての「魅力ある授業」と教師にとっての「価値ある授業」についてそれぞれの限界を指摘し、その限界を止揚するための第三の対立軸として「冒険・挑戦」が取りあげられたものである。

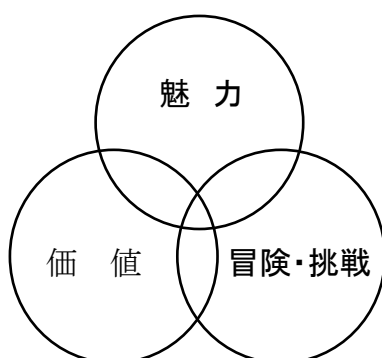


図 1. 体育授業プログラムづくりの三元論的相互干渉モデル（根上, 2012）

学内での体育授業の「挑戦・冒険」は、挑戦的な目標設定を行う授業とし、教育成果の自己成長の指標としては、ポジティブな徳性（人間の強み、長所、価値、徳目）とし

た。ポジティブな徳性は、6つの美德（勇気、正義、超越性、節度、人間性と愛、知識と知恵）の下に24個の強み・長所の概念で構成されている（表1）。これらの強み・長所は、スポーツ競技に必要なかつスポーツ競技によって育まれる可能性のある内容が多数含まれている。

表1. ポジティブな徳性の構成概念

美德 (Vatue)	強み/長所 (character strength)
勇気	勇敢さ、忍耐力、誠実さ、熱意
正義	チームワーク、公正さ、リーダーシップ
超越性	審美心、感謝、希望、ユーモア、精神性
節度	寛大さ、謙虚さ、慎重さ、自制心
人間性と愛	親切さ、愛情、社会的知性
知恵と知識	好奇心、向学心、判断力、独創性、大局観

このポジティブな徳性を向上させることによって、教養教育の究極の目的である、自己陶冶、人格形成に合致する自己成長をはかる大学体育授業研究を行うところに、大学体育の必修化を主張しうる根拠が得られると考える次第である。

橋本公雄・西田順一・木内敦詞・堤義彦著（2020）自己成長をはかる大学体育—挑戦的課題達成型体育授業の理論と実践—（花書院）に掲載

今後の授業研究の在り方の概略を話したあと、藤原大樹先生（崇城大学）と橋本公雄（九州大学名誉教授）から具体的な実践事例として、挑戦的課題達成型体育授業による自己成長をはかる体育授業を紹介することとする。

Ⅱ. 大学体育必修化への回帰に向けての方略

Ⅱ-1. 挑戦的課題達成型テニス授業によるポジティブな徳性の向上効果

藤原 大樹（崇城大学）

目 的

挑戦的課題達成型を導入したテニス授業の学修成果を明らかにするため、授業前後におけるポジティブ徳性、テニスの自己効力感、テニススキルの変化を検討した。

方 法

1. 対象

2022年度後期に開講された「健康スポーツ教育Ⅱ」の受講者124名のうち、データの揃った学生を分析対象とした。

2. 測定尺度

1) ポジティブ徳性

体育授業におけるポジティブ徳性を測定するため、体育授業版ポジティブな徳性尺度（橋本ら, 2019）を使用した。この尺度は勇気、正義、人間性と愛、節度、超越性、知識と知恵の6因子計24項目で構成されている。

2) テニスの自己効力感

授業におけるテニススキルの自己効力感を測定するため、佐久間ら（2017）が作成したソフトテニスにおける自己効力感尺度を使用した。本研究では、実施した種目がソフトテニスではなく硬式テニスであること、受講者の多くが初心者であり、習得を目指すスキルレベルが低いことから、項目の修正を行った。

3) テニスのスキル

テニスのスキルを評価するために、ラリーテストとサーブテストを実施した。ラリーテストは9回実施したラリー（3人と3回ラリー）のうちの最長回数、サーブテストは10本打った際（左右5本）の成功回数を記録した。

3. 介入法

初回授業時に冊子を配布し、①挑戦的目標設定、②目標の振り返りレポート、③人間性向上プログラム、④リーダーシップ体験を実施した。

結 果

授業前後における受講者のポジティブ徳性、テニスの自己効力感、テニススキルの変化を検討した。結果の詳細については当日発表する。

Ⅱ-2. 挑戦的課題達成型バドミントン授業の教育成果および自己成長モデル

橋本 公雄（九州大学名誉教授，元熊本学園大学）

目 的

挑戦的課題達成型のバドミントン授業による体育授業の主観的恩恵、気づき、ポジティブな特性などの心理的機能への効果から体育教育の成果を明らかにするとともに、主観的恩恵→気づき→ポジティブな徳性のモデルを構築することを目的とした。

方 法

1. 対象

2019年度前期のバドミントンの実技授業を受講した男女学生40名（男子21名、女子19名）を分析の対象とした。

2. 測定尺度

1) 主観的恩恵

西田ら（2016）が作成した「初年次体育授業主観的恩恵評価尺度」を用いた。本尺度は「運動スキル・練習方法の習得」「協同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上」「ストレス対処とポジティブ感情の喚起」「体力・身体活動の増強」「規則的な生活習慣の確立」の5因子、25項目から構成されている。

2) 気づき

体育授業に伴う気づきを測定するため、山崎ら（2019）が作成した、「他者交流への気づき」「自己への気づき」「ポジティブ感情への気づき」の3因子、12項目からなる「体育授業版気づき尺度」を用いた。

3) 体育的ポジティブな徳性

体育授業による体育授業に特化したポジティブな徳性を測定するため、橋本ら（2019）が作成した、美德の6領域（勇気、正義、人間性と愛、節度、超越性、知識と知恵）を含む24項目からなる「体育授業版ポジティブな徳性尺度」を用いた。

4) 一般的ポジティブな徳性

すでに翻訳され公表されているポジティブな徳性尺度項目の簡易版（強み尺度、48項目）を用いた（セリグマン/宇野, 2014）。これはポジティブな徳性の24個の概念（各概念2項目ずつ）からなっている。

3. 介入法

授業の効果を高めるために、介入法として目標設定法とポジティブ心理学介入を用い、冊子を配布した（当日配布）。

1) 目標設定法

目標設定法としては、SMARTを指導した。SMARTとは、効果的な目標設定の仕方の留意事項を示すもので、Specific（具体的）、Measurable（測定可能な）、Achievable（達成可能な）、Realistic（現実的）、Time bound（期限つき）の英語の頭文字からなるものである（Doran, 1981）。

2) ポジティブ心理学介入

ポジティブ心理学介入のうち、「うまくいったこと」と「強みの活用」のエクササイズを用いた。「うまくいったこと」とは、うまくいったことを3つ挙げさせ、その理由を書かせるものである。「強みの活用」とは、一般的ポジティブ尺度による強み・長所を5つ抽出し、その強み・長所を授業のなかで活かすものである。

結 果

1. 心理的機能の変化

主観的恩恵、気づき、体育的ポジティブな特性、一般的ポジティブな特性の4つの心理的機能における学期末の変化を調べたところ、各心理的機能とも男女に関係なく尺度合計得点およびほとんどの下位尺度得点は顕著な増加を示した（図2）。

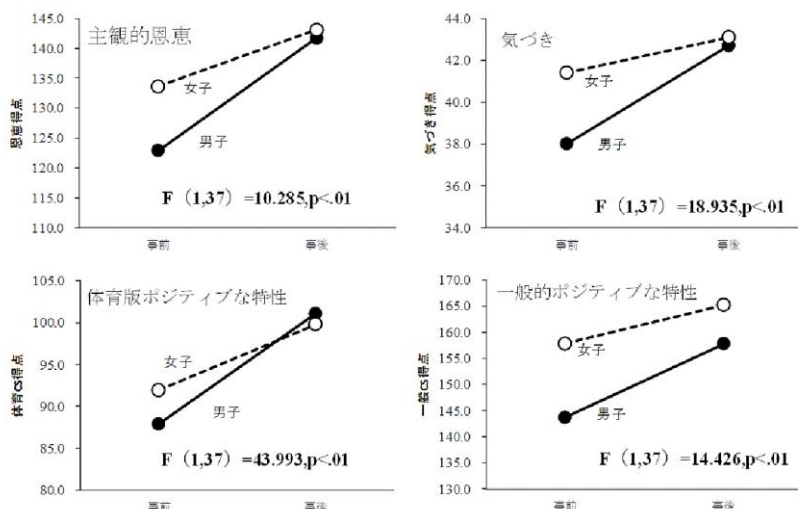


図 2. 挑戦的課題達成型体育授業による心理的変数の変化

2. モデルの構築

Baron & Kenny (1986) の媒介変数の検証法に準拠し、階層的重回帰分析を用いて検証を行い、モデルを構築した。

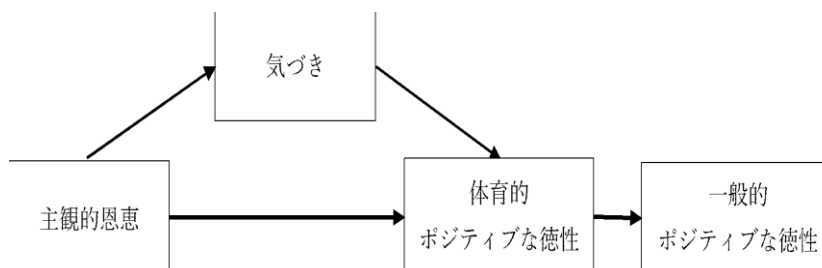


図 3. 大学体育によるポジティブな徳性の向上効果の拡大モデル

Ⅲ. 「運動」としての大学体育必修化への回帰の具体的提言

大学体育連合（大体連・地方の体育連合）は、大学体育の必修化への回帰に向けたさまざまな情報を収集し、各大学へ配信し、大学体育必修化への回帰運動を起こす必要がある。

1. 各大学での大学体育授業研究の促進

学内に一般教育としての大学体育における教育方針（目的）を周知するために、授業研究の促進を図る。研究課題は、できるだけ一般教育の理念・目標、大学の建学の精神（私学）等に沿ったものがよい。また、論文・研究資料は、各大学で刊行される紀要論文がよい。

これに関連して、大学体育連合が実施すべき調査と会議は、以下のとおり。

- 1) 大学体育必修・選択と連合加盟の関係を調べること。
- 2) 「この論文・データで必修化を説得できた」との情報を収集すること。
- 3) 必修として残っている大学、あるいは再必修化された大学（西南学院大学など）の情報を収集し、理由を分析すること。
- 4) 大学体育必修化へ向けての戦略会議を開催すること（大学体育連合研修会にて）。

2. 学内における「運動・スポーツ文化の醸成」への大学貢献

学生のキャンパスライフの充実と大学の活性化のために、体育教員は「運動・スポーツ文化の興隆」に尽力し、大学に貢献する。

例) 熊本学園大学

これからの大学づくりに必要なのは、スポーツの力を活用することを執行部に語り、構想案を提示し、「スポーツ文化拠点大学づくり構想」を大学の方針として位置づけた。すべてがこの冠のもとに動いている。小さな大学はこういうことができる。

- 1) 学生のキャンパスライフを運動・スポーツでエンジョイ（日本学術会議の21世紀の提言）
 - ・大学体育授業で学生が好意的態度形成できても、授業外で実施するところがない。
運動施設・場所の開放、活動時間の確保（昼休み、業間、放課後）

<九大の例> 4時限目終了1時間は一般学生に運動施設を開放（半世紀継続）

- 2) 運動・スポーツ活動の活性化

・運動部と協力してスポーツ推進委員会（仮称）の設置

<熊学の例> スポーツ・デー委員会（学生、教員で組織）の設置（現在休眠中）

<福大の例> ASASPO 倶楽部の設置（スポーツ科学部）

・スポーツイベントの開催（教職員も参加）

<熊学の例> 学長杯争奪リレーマラソン大会（4回開催、コロナ禍で中止）

将来的には、九州地区大学体育協議会（九州インカレ）とも連携

大学間リレーマラソン大会の開催（各大学1チーム参加）

3. 九州体育・スポーツ学会の専門分科会としての大学体育授業研究専門分科会の設置

将来的には、九体連主導で、同学会に第6専門分科会としての設置を目指す。

（詳細は、体育・スポーツ教育研究 22 巻第 1 号に掲載）

一般発表プログラム

- 【日程】1日目 3月13日（月）13：00～15：47（第1～2セッション）
 2日目 3月14日（火）10：40～14：52（第3～5セッション）
 【会場】九州産業大学，オンライン（ハイフレックス開催）（全5セッション）
 【内容】17演題（研究報告11演題，事例報告6演題）
 【時間】発表12分，質疑応答5分，計17分間

【第1セッション】＜オンライン発表＞ 座長：森 誠護（九州共立大学）

研究-1	13:00~13:17	大学体育授業における批判的思考態度と主観的恩恵評価の関係
	○鳥井淳貴(宝塚医療大学), 中須賀巧(兵庫教育大学大学院)	
研究-2	13:20~13:37	運動部活動の継続性とポジティブな徳性の関係: 日本版生き方の原則調査票を用いた検討
	○霜鳥駿太(筑波大学), 木内敦詞(筑波大学), 西田順一(近畿大学), 中雄勇人(群馬大学)	
事例-1	13:40~13:57	特別支援学校と連携したダンスの指導実践に関する事例研究: 小学校教員養成課程の体育実技に着目して
	○常行泰子(神戸市外国語大学), 坂井香代(高知大学教育学部附属特別支援学校)	
研究-3	14:00~14:17	硬式野球部員の非認知的能力と自発的トレーニングの実践と成果
	○石川敬之(北九州市立大学)	

【第2セッション】＜現地発表＞ 座長：綾部 誠也（岡山県立大学）

研究-4	14:30~14:47	大学体育館における暑さ指数の評価とその安定性: 熱中症予防情報サイトとの比較を通して
	○高橋和文(金城学院大学), 稲嶋修一郎(愛知県立大学)	
研究-5	14:50~15:07	部活動改革の現状: 部活動改革の在り方に関する総合的なガイドライン(2018年3月~2023年2月)
	○桑野裕文(九州情報大学)	
研究-6	15:10~15:27	地方大都市の私立大学スポーツ専門学部新入生のセグメンテーション
	○山口幸生, 藤井雅人(福岡大学)	
研究-7	15:30~15:47	大学一般体育で育成される対処資源の効果
	○阪田俊輔(横浜商科大学), 杉山佳生(九州大学)	

【第3セッション】＜現地発表＞ 座長：森村 和浩（就実大学）

事例-2	10:40~10:57	必修体育科目におけるハイブリッド授業の全学的展開
	○川邊保孝, 吉原さちえ, 植村隆志, 八百則和, 小山孟志, 與名本稔, 小河原慶太(東海大学)	
事例-3	11:00~11:17	インクルーシブな視点を取り入れた大学スポーツ授業の試み: コロナ禍における学生のキャンパスライフに着目して
	○吉原さちえ, 川邊保孝, 植村隆志(東海大学)	
研究-8	11:20~11:37	対面授業再開後における活動実態と生活習慣に関する調査
	○藤田恵理(東京女子大学), 田村達也(青山学院大学), 高橋将, 鈴木明(大東文化大学), 山本実友菜(青山学院大学), 小出高義(大東文化大学), 平工志穂(東京女子大学)	

【第4セッション】＜オンライン発表＞ 座長：堀田 亮（近畿大学九州短期大学）

研究-9	12:45~13:02	学生主体の協同型学習は, 運動パフォーマンスを向上させるか
	○佐藤和(千葉工業大学)	
研究-10	13:05~13:22	剣道の授業における「学びの深化」を促す授業実践の研究
	○高瀬武志(桐蔭横浜大学)	
研究-11	13:25~13:42	ライフスキル獲得による体育実技授業受講生の類型化とその特徴
	○陳昱龍, 前田奎, 成相美紀, 梶田和宏, 吉中康子(京都先端科学大学)	

【第5セッション】＜オンライン発表＞ 座長：深田 忠徳（九州産業大学）

事例-4	13:55~14:12	足元から見直す大学生の健康づくり, 動きづくり: 接地足跡形態および歩容の特徴と, 改善に向けた草履サンダル導入の事例報告
	○宮口和義(石川県立大学), 畠本紗斗子(金沢工業大学)	
事例-5	14:15~14:32	コロナ禍における体育(ダンス)授業の展開と検討: 事例からみる実技として成り立たせるための工夫
	○飯田路佳(十文字学園女子大学), 田中安理(常葉大学), 多田五月(帝京大学), 川上美里(帝京大学), 清水文子(十文字学園女子大学)	
事例-6	14:35~14:52	芸術大学の特性をふまえた健康教育の実践
	○岸本榮嗣(京都芸術大学)	

一般発表抄録（研究報告・事例報告）

3月13日（月）13:00～15:47（第1～2セッション）

3月14日（火）10:40～14:52（第3～5セッション）

17演題5セッション（研究報告11演題, 事例報告6演題）

第1セッション4演題（13:00～14:17）
<研究報告1-3・事例報告1>
座長：森 誠護（九州共立大学）
第2セッション4演題（14:30～15:47）
<研究報告4-7>
座長：綾部 誠也（岡山県立大学）
第3セッション3演題（10:40～11:37）
<研究報告8・事例報告2-3>
座長：森村 和浩（就実大学）
第4セッション3演題（12:45～13:42）
<研究報告9-11>
座長：堀田 亮（近畿大学九州短期大学）
第5セッション3演題（13:55～14:52）
<事例報告4-6>
座長：深田 忠徳（九州産業大学）

研究報告 1_13:00-13:17 (3/13)

大学体育授業における批判的思考態度と主観的恩恵評価の関係

鳥井淳貴¹, 中須賀巧²

¹宝塚医療大学保健医療学部, ²兵庫教育大学大学院学校教育研究科

キーワード: 大学生, 体育実技, 共分散構造分析

【目的】本研究は、大学体育授業における批判的思考態度と主観的恩恵評価の関係を明らかにすることを目的とした。【方法】体育授業を履修した大学1年生137名（男子53名，女子84名）を対象に，批判的思考態度尺度および主観的恩恵評価尺度を使用した。調査1回目の批判的思考態度（以下，批判1〇〇）の下位尺度を独立変数，主観的恩恵評価の下位尺度を媒介変数，2回目の批判的思考態度（以下，批判2〇〇）の下位尺度を従属変数とする共分散構造分析を実施した。【結果】まず，モデルのデータへの適合度は全ての指標において基準を満たす値が得られた（GFI=.956, AGFI=.903, CFI=.999, RMSEA=.014）。次に，有意なパス係数について述べる。批判1客観性は，批判2客観性（ $\beta=.32$ ）に正のパス，批判2探究心（ $\beta=-.24$ ）に負のパスを示した。批判1証拠の重視は，批判2証拠の重視（ $\beta=.42$ ）と批判2探究心（ $\beta=.22$ ）に正のパスを示した。批判1探究心は，運動スキル（ $\beta=.37$ ），ストレス対処（ $\beta=.34$ ），批判2客観性（ $\beta=.20$ ），批判2探究心（ $\beta=.65$ ）に正のパスを示した。また，協同プレー（ $\beta=.30$ ）を介して批判2探究心（ $\beta=.15$ ）に正のパス，批判2論理的思考への自覚（ $\beta=-.10$ ）に負のパス，体力・身体活動（ $\beta=.38$ ）を介して批判2論理的思考への自覚（ $\beta=.12$ ）に正のパスを示した。批判1論理的思考への自覚は，運動スキル（ $\beta=.30$ ），規則的な生活（ $\beta=.25$ ），批判2論理的思考への自覚（ $\beta=.47$ ）に正のパスを示し，体力・身体活動（ $\beta=.38$ ）を介して批判2論理的思考への自覚（ $\beta=.12$ ）に正のパスを示した。なお，決定係数は，運動スキル（ $R=.10$ ），規則的な生活（ $R=.03$ ），協同プレー（ $R=.05$ ），ストレス対処（ $R=.05$ ），体力・身体活動（ $R=.12$ ），批判2客観性（ $R=.30$ ），批判2証拠の重視（ $R=.28$ ），批判2探究心（ $R=.52$ ），批判2論理的思考への自覚（ $R=.34$ ）を示した。【結論】大学体育授業を受講することによる学習者の批判的思考態度は，直接および間接的に正負のパスが確認されたが，主観的恩恵評価は総合的に高まる可能性が示唆された。

研究報告 2_13:20-13:37 (3/13)

運動部活動の継続性とポジティブな徳性の関係：

日本版生き方の原則調査票を用いた検討

霜鳥駿太¹, 木内敦詞², 西田順一³, 中雄勇人⁴

¹筑波大学大学院, ²筑波大学体育系, ³近畿大学経営学部, ⁴群馬大学共同教育学部

キーワード: the Values in Action Inventory of Strengths (VIA-IS), positive psychology, 大学生

【背景と目的】ポジティブ心理学の主要テーマのひとつに，ポジティブな徳性がある。ポジティブな徳性は，24の強み・長所を6つの美德に整理した概念である。その育成に大学体育授業が関係していることが示唆されている（橋本ほか，2020）が，運動部活動経験との関係は明らかではない。そこで本研究では，運動部活動の継続性とポジティブな徳性との関係を検討することを目的とした。【方法】関東の国立大学，公立大学，各1校の一般体育受講生828名を対象に，日本版生き方の原則調査票（大竹ほか，2005）および部活動の継続性と一貫性を尋ねる質問紙調査を実施した。また，同大学の一般体育受講生80名を対象に，Big Five短縮版尺度（TIPI-J：小塩ほか，2012）を用いて調査を実施し，信頼性と妥当性の検証として α 係数の算出（内的整合性）と再テスト信頼性（3週間），確認的因子分析（構成概念妥当性），併存的妥当性の解析をした。【結果】主な結果は以下の5点であった。①信頼性については，内的整合性（ $\alpha=.58-.78$ ），再テスト信頼性（ $r=.52-.81$ ）であり，許容範囲内の信頼性が確認された。②妥当性については，確認的因子分析の結果はGFI=.829, CFI=.776, AGFI=.806, RMSEA=.054, 類似尺度「TIPI-J」との有意な相関があり，一定の妥当性が確認された。③ポジティブな徳性は極低群，低群，中群，高群に類型化され，残差分析の結果，中学校のみ運動部の者は「低群」に多く，「中群」に少なかった。④ポジティブな徳性には性差があり，「勇気」「人間性」「超越性」の得点は男性より女性が高かった。⑤複数のポジティブな徳性で，異種目継続型より同一種目継続型の得点が高かった。【結論】本研究にて，日本版生き方の原則調査票の信頼性と妥当性を確認し，同一種目を継続することとポジティブな徳性の関係が示唆された。

事例報告 1_13:40-13:57 (3/13)

特別支援学校と連携したダンスの指導実践に関する事例研究： 小学校教員養成課程の体育実技に着目して

常行泰子¹, 坂井香代²

¹神戸市外国語大学外国語学部, ²高知大学教育学部附属特別支援学校

キーワード：インクルーシブ教育, 知的障害, 健康支援, ヘルシーエイジング

【背景と目的】インクルーシブ教育は、障害の有無に関わらず人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の共生社会（文部科学省，2012）を目指している。しかしながら、障害を持つ子どもの教育に携わる教員自身については、現在特別支援に直接的に関わる一部の教員を除いて、障害に関する知識・理解、さらに実践的な教育活動の経験が十分とは言えない現状がある。大学改革を踏まえた教育の質保証には、障害のある子どもと障害のない子ども、さらに教職を志望する学生の教育研究を各関連機関が連携・協働して推進することが望ましい。本研究では、知的障害のある子どもを対象としたチアダンス指導に関して分析を行い、小学校教員を志望する学生の指導実践について検証することを目的とした。【方法】Creswell(2003)が提唱するミックス法（mixed methods）を採用し、質的データを収集、トライアングレーションを実施した。【結果と考察】学生・生徒間において、指導における「ノンバーバルコミュニケーション」の重要性が示唆され、子どもとの信頼関係やラポール形成に触れる言説がいくつか示された。ダンス指導において、既に学習した他の教科と共通する横断的な学習経験が生かされていることが明らかになった。特別支援学校による評価からは、一定の教育成果が示されたと同時に、指導と事前準備、さらに雰囲気づくりに関する今後の課題が提示された。【結論】共生社会形成のためのインクルーシブ教育は、教科横断的な学習だけでなく、障害のある子どもと障害のない子ども、そして教員を目指す学生や教員の組織としての効果が期待できる。

研究報告 3_14:00-14:17 (3/13)

硬式野球部員の非認知的能力と自発的トレーニングの実践と成果

石川敬之

北九州市立大学地域共生教育センター・地域創生学群

キーワード：パフォーマンス, 自制心, 誠実性, 開放性, 自尊感情

【目的】大学硬式野球部員の非認知的能力を測定し、補強的ウエイトトレーニング（以下、補強トレーニング）への自発的参加とその成果との関連性を分析した。補強トレーニングへの自発的な参加には各部員の開放性や自尊感情といった非認知的能力、またトレーニングの継続には自制心や誠実性が重要になると考えられ、両者の関連性が明らかになることで各部員の性格を考慮した適切なトレーニング、またコーチングも可能になると言える。【方法】補強トレーニングへの参加者、および非参加者それぞれの性格特性を測定した。誠実性と開放性は Ten-Item Personality Inventory を使用し、5 件法で測定した。新たな活動への参加動機に関連すると考えられている自尊感情はローゼンバーグ自尊感情尺度によって測定した。トレーニングの継続やパフォーマンス向上に必要な自制心は Tangneyetal(2004)によるセルフコントロール尺度の 5 件法を採用した。補強トレーニングは 4 ヶ月以上実施し、定期的に参加部員のパフォーマンスを測定した。【結果】補強トレーニングへの参加は全員が継続し、パフォーマンスの向上も見られた。非認知的能力に関しては補強トレーニングに参加した部員のスコアがレギュラー部員よりも相対的に低いことが明らかになった。唯一、野手グループの開放性スコアがレギュラー部員よりも高かった。レギュラー部員は自制心、開放性、自尊感情において全部員よりも高い値を示した。【結論】自制心や誠実性は野球のパフォーマンスにも関連すると考えられる。開放性は新たなトレーニングメニューなどに対する部員の興味とも関連しているため、チームとしてそうしたトレーニング機会を作り部員に提供することはチーム全体のパフォーマンス向上にとっても重要になると考えられる。

研究報告 4_14:30-14:47 (3/13)

大学体育館における暑さ指数の評価とその安定性： 熱中症予防情報サイトとの比較を通して

高橋和文¹, 稲嶋修一郎²

¹金城学院大学, ²愛知県立大学

キーワード：WBGT, 熱中症予防, 温熱性能, 補正值

【背景と目的】熱中症予防のためには、運動やスポーツを実施する場所の気温や暑さ指数をより正確に知る必要がある。暑さ指数は、Wet Bulb Globe Temperature（以下、WBGT）として、環境省の熱中症予防情報サイトから、日本各地の実測値や実況推定値が提供されている。本研究の目的は、複数年にわたる大学体育館 WBGT の独自の観測データと熱中症予防情報サイトの WBGT データの比較を通して、大学体育館内の WBGT を評価し、その安定性を検証することである。【方法】大学体育館における WBGT は、愛知県内にある公立大学の体育館において、床面から 1.5m の高さに設置した WBGT 計により観測した。観測は、2021 年 5 月 22 日から 10 月 8 日と、2022 年 5 月 15 日から 10 月 12 日までの複数年の期間で、5 分毎にデータを観測し、分析には毎正時のデータを用いた。比較対象とした WBGT は、熱中症予防情報サイトで名古屋市の屋外観測データとして提供される、上の期間と同刻の毎正時のデータとした。分析には、同刻のデータを用いて、公立大学体育館の WBGT から名古屋市の WBGT を差し引いた差分データを用いた。分析は、python3.7.9 を用いて実施した。【結果と考察】差分データは、周期性を有しており、体育館の温熱性能を捉えていた。各時間帯別の WBGT 差分の平均値は、2021 年と 2022 年で極めて似通った数値を示した。つまり、本研究で提案した評価手法は、安定性を有しているため、補正值としても活用できる。この補正值は、環境省の WBGT とあわせて活用することで、より正確に体育館内の WBGT を把握し、大学体育や部活動の場面での熱中症予防に取り組むことを可能とする。【結論】時間帯別の WBGT 差分データの平均値は、複数年で時間帯ごとに安定した数値を示した。このことから本研究で提案する評価手法の活用は、高い精度で大学体育館の WBGT を推計することを可能とする。

研究報告 5_14:50-15:07 (3/13)

部活動改革の現状：

部活動改革の在り方に関する総合的なガイドライン（2018 年 3 月～2023 年 2 月）

桑野裕文

九州情報大学

キーワード：働き方改革, 少子化, 地域移行, 運営主体, 改革推進期間別

【背景と目的】生徒の自主的・自発的な参加により行われる学校部活動は、生徒にとって教育的意義の高い活動である。しかし、部活動には教員のボランティア精神と献身的な勤務に支えられている側面があり、部活動指導で負担のかかる教員の働き方改革は急務である。また少子化に伴う部員減少問題で、日々の活動維持や、大会参加が困難な状況にある。このような学校部活動を改善すべく、国は令和 2 年 9 月に「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革」において、公立中学校における休日部活動の段階的な地域移行を示した。その後のパブリックコメントでは、教員の負担軽減を歓迎する声は多かったが、一方では「過疎地域では部活動を指導する人材不足」や「3 年間での移行達成は現実的に厳しい」などの意見が多数寄せられた。そのためスポーツ庁は令和 4 年 12 月に、3 年間の改革集中期間中の目標達成は見送り 3 年間で改革推進期間と位置づけながら「地域の実情等に応じて可能な限り早期の実現を目指す」とした。そこで、部活動改革の現状を明らかにし、部活動改革の展望を模索する。【結果・課題】課題として、（1）部活動改革に係る推進計画の策定と改革に向けた推進委員会の設置、（2）人的資源の再構築、（3）財源の整理と会費のありかたの検討、（4）中体連やスポーツ団体との連携・調整、（5）ハラスメントや事故が発生した場合の責任のあり方（所在）及び保険制度の検討 などがある。【結論】新年度より公立中学校では、学校部活動を地域主体の運営に移行する取り組みが始まり、段階的に休日の部活動の場を地域のクラブに移す予定である。運営主体はどこなのか、指導者の確保できるのか、適切な報酬の提供はできるのか、生徒の支払う会費負担は増額しないのか等、解決すべき問題は山積する。国に対し、部活動改革を学校・地域の裁量に委ねるのではなく、部活動の目標、活動時間（どの程度行うべきなのか）、教師や地域指導者への待遇等について基準を定め、部活動への教育方針の指針を求めたい。

研究報告 6_15:10-15:27 (3/13)

地方大都市の私立大学スポーツ専門学部新入生のセグメンテーション

山口幸生, 藤井雅人

福岡大学スポーツ科学部

キーワード: 性別, 大学選択理由, 卒業時の理想像, 競技レベル, クラスタ分析

【背景と目的】大学受験人口の減少を背景に, スポーツ専門学部においてもアドミッションポリシーに沿った質の高い学生獲得の戦略を練る必要に迫られている. 本研究では, 地方大都市の私立大学スポーツ専門学部新入生をセグメンテーションし, セグメントの特徴比較することを研究目的とした. 【方法】対象は, 2020-21年のF大学スポーツ専門学部新入生 575名であった. 調査は4月に実施した. 調査項目は, 性別, 学部選択理由, 大学卒業時の理想像, コンピテンシーテスト (PROG, (株)リアセック), および新規作成の「やり抜く力」「親の統制的養育態度」「セルフコントロール」であった. 【結果と考察】Two-Step クラスタ分析の結果, 3つのクラスター (男子競技志向 (以下MS)・男子勉強志向 (MA)・女子勉強&競技志向 (FAS)) が作成された. クラスタ一品質指標は, 0.02を示し, 分類は適正と考えられた. MSでは, 84%の学生が「競技力向上」を大学選択理由に挙げ, 60%が「競技を活かして就職する」ことを大学卒業時の理想としていた. MAでは, 99%の学生が「将来の勉強」を大学選択理由に挙げ, 45%が「勉強して教員合格」, 27%が「学業を頑張る就職」することを卒業時の理想としていた. FASでは, 57%の学生が「将来の勉強」, 39%が「競技力向上」を大学選択理由に挙げ, 48%が「勉強して教員合格」, 24%が「競技を活かして就職」することを卒業時の理想としていた. MAの学生は, 対自己基礎力, 対課題基礎力, セルフコントロール得点が, 他のクラスターより低かった. 【結論】F大学スポーツ専門学部新入生は3つのクラスターに分類され, 男子勉強志向クラスターの学生は他のクラスター学生よりコンピテンシーおよびセルフコントロール得点が低かった.

研究報告 7_15:30-15:47 (3/13)

大学一般体育で育成される対処資源の効果

阪田俊輔¹, 杉山佳生²

¹横浜商科大学商学部経営情報学科スポーツマネジメントコース, ²九州大学大学院人間環境学研究院

キーワード: ストレスコーピング, 問題焦点型コーピング, 心理社会的スキル

【目的】対処資源とはコーピングに先行して対処方略の選定, 対処努力の維持, 対処方略の効果に影響を及ぼす要因 (Lazarus & Folkman, 1984) であり, ストレス場面のみで活用されるものではなく, 個人が持つ汎用的な資源である. 体力, 自尊感情, 情報活用能力, ソーシャルキャピタルが定義され, 他者との交流や競技力向上の工夫が必要となる大学一般体育に影響を受ける (阪田ほか, 2022). 本研究では, ①大学一般体育で教育された対処資源が, ストレス対処の効果にどう影響するか, また②授業で発揮されるストレス対処スキルの授業外への般化にどのように影響するのかを検討した. 【方法】大学一般体育を受講した学生 155名を対象に質問紙調査を実施した. 測定内容は対処資源 (4因子各5項目), 授業内でのストレス対処 (問題焦点型, 情動焦点型: 各3項目), 授業外でのストレス対処 (問題焦点型, 情動焦点型: 各3項目), 授業でのストレス反応 (ポジティブ・ネガティブな感情: 各4項目) であった. 【結果】①を検討するため, 対処資源及びストレス対処を独立変数, ストレス反応を従属変数とする二元配置分散分析を実施した. その結果, ポジティブな感情に対する対処資源と問題焦点型対処の主効果 ($F(1, 151)=7.44, p<.01; F(1, 151)=6.67, p<.01$) が確認された. 次に②を検討するため, 授業でのストレス対処を独立変数, 対処資源を媒介変数, 授業外でのストレス対処を従属変数とした共分散構造分析を実施した. その結果, 対処資源が, ストレス対処の般化について部分媒介することが確認された (直接効果 $\beta=.48 \rightarrow .23$, 媒介効果 $\beta=.27$). 【考察】本研究の結果から, 対処資源を多く持つ学生ほど問題焦点型対処に成功し, また授業で発揮されるストレス対処スキルを授業外へ般化できていることが確認された. 本研究の結果から, 大学一般体育は大学生のストレス対処スキル向上に寄与する可能性が示された.

事例報告 2_10:40-10:57 (3/14)

必修体育科目におけるハイブリッド授業の全学的展開

川邊保孝¹, 吉原さちえ¹, 植村隆志¹, 八百則和¹, 小山孟志², 與名本稔², 小河原慶太²

¹東海大学スポーツプロモーションセンター, ²東海大学体育学部

キーワード: 授業改善, ポストコロナ, DX

【背景と目的】東海大学では、約 28,500 名に及ぶ全学生が履修する必修科目として健康スポーツ科目が開講されている。健康スポーツ科目は、「健康・フィットネス理論実習」と「生涯スポーツ理論実習」という 2 科目から構成されており、健康と体育・スポーツ活動の意義を学び、将来の人生をより豊かにできるようなライフスタイルを身に付けることを目的とする。また、初年次教育として“友達づくり”や“仲間との信頼関係づくり”の機能を重視している。本発表では、大規模な必修体育科目におけるコロナ禍を契機とした遠隔授業導入と対面授業再開によるハイブリッド授業の確立までの実践について報告する。【結果】2020 年度前期は新型コロナウイルス感染症により全ての授業を遠隔授業で実施しなげなかつたが、同年後期からは、学生間の交流という目的の一つを達成するため、感染症対策を徹底したうえで全 14 回のうち 3 回を対面授業による体育実技として再開させた。2021 年度後期からは体育実技を 6 回に増やし、遠隔授業による講義と合わせたハイブリッド授業として展開している。講義については動画資料ならびに教科書を用いたオンデマンド形式の遠隔授業となっており、専用ホームページを独自に開設して学生への配信を集約している。なお、動画資料の作成は、東海大学体育学部やスポーツプロモーションセンターのみならず全国のキャンパスの体育・スポーツ・健康分野の教員がその専門性を活かして担当している。体育実技については、更衣することなく実践できることを一つのコンセプトとしており、生涯スポーツ理論実習では、ロゲイニング、ボッチャ、グラウンドゴルフを採用している。今後は、授業効果ならびに学生の授業評価の測定とそれをもとにした授業改善が課題であり、ポストコロナにおける必修体育科目のあり方について検討・実践を進めたい。

事例報告 3_11:00-11:17 (3/14)

インクルーシブな視点を取り入れた大学スポーツ授業の試み：

コロナ禍における学生のキャンパスライフに着目して

吉原さちえ¹, 川邊保孝¹, 植村隆志²

¹東海大学スポーツプロモーションセンター, ²東海大学体育学部

キーワード: 大学生, 生涯スポーツ, インクルーシブ (包括的), スポーツ授業

【背景と目的】2021 年に開催された東京 2020 大会ビジョンでは、3 つの基本コンセプトの中で「一人ひとりが互いを認め合い (多様性と調和)」を掲げていた。大会を通して「文化」「性」「世代・ライフステージ」「心身機能」これら 4 つの違いを知り示すことは、大会以降も日本社会に暮らす誰もが豊かな生活を送れるようになることを期待していたのではないかと。2020 年 1 月以降国内外に感染拡大した新型コロナウイルスは、学生が期待していたキャンパスライフを一転させた。そこで東海大学ではインクルーシブ (包括的) な視点を取り入れ大学におけるスポーツ授業を積極的に展開することは、コロナ禍ではあるものの、学生生活の一助となるのではないかと考えた。本研究では、大学でのインクルーシブな視点を取り入れたスポーツ授業の機会を通して、学生生活の中でコミュニケーション場面への影響を明らかにすることを目的とした。【方法】東海大学では全学生を対象としたスポーツ授業を展開している。そのうち「生涯スポーツ理論実習 (グラウンド・ゴルフとロゲイニング)」の受講学生 (一部) による授業感想から、インクルーシブな授業が学生に与える影響を紐解くこととする。【結果】1) 両授業では、授業を通じてスポーツの印象や捉え方がこれまでと異なり、スポーツの広がりを感じていることが明らかとなった。2) コロナ禍で学生同士コミュニケーションを図る機会が限られる中、両授業がコミュニケーションのきっかけに繋がることが明らかとなった。3) インクルーシブなスポーツ授業は、学生のキャンパスライフの一助となることが明らかとなった。【結論】これら 3 つの結果から、インクルーシブなスポーツ授業を展開することは、学生にとって人生の新たなコミュニケーションを生み出す学生生活の中で、コロナ禍に限らず非常に重要な役割を果たしていたのではないだろうか。つまり大学におけるスポーツ授業は、キャンパスライフの一役を担うと考えることができる。

研究報告 8_11:20-11:37 (3/14)

対面授業再開後における活動実態と生活習慣に関する調査

藤田恵理¹, 田村達也², 高橋将³, 鈴木明³, 山本実友菜², 小出高義³, 平工志穂¹

¹東京女子大学, ²青山学院大学, ³大東文化大学

キーワード: 大学新入生, COVID-19, アンケート調査

【背景と目的】新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は外出自粛など、人々の行動を制約した。これらの影響は授業のオンライン化など大学にも影響を及ぼし、2021年度（21年度）まで続いた。一方、2022年度（22年度）になってからは緊急事態宣言やまん延防止等重点措置は発令されず、COVID-19 対策と両立する教育活動を目指し、原則対面授業を実施する大学が増えてきている。そのため、22年度に入学した新入生の活動実態と生活習慣は異なる可能性が高い。そこで本研究では、22年度の大学新入生を対象に、対面授業再開後の活動に関する実態や生活習慣を把握するために、21年度と22年度の大学新入生の歩数、外出時間、運動時間などの活動に関する実態や生活習慣（睡眠時間など）を21年度の大学新入生と比較し、活動に関する実態や生活習慣に違いがみられるかを明らかにすることを目的とした。【方法】21年度と22年度の大学新入生それぞれ195名、153名を対象とした。対象者は入学後5～6月にWebアンケート調査を行った。アンケート調査内容は、登校の回数、歩数、外出時間、運動時間、睡眠時間、携帯利用時間、起床時体温、就寝時体温、睡眠の質、体調、ストレス、起床時刻、就寝時刻であった。【結果と考察】登校の回数、歩数、外出時間、運動時間は21年度と比較して、22年度は有意に多かった。睡眠時間、携帯利用時間は21年度と比較して、22年度は有意に少なかった。起床時刻（午前7時まで）は21年度と比較して、22年度は有意に多かった。体調とストレスは21年度と比較して、22年度は不良であった。また、ほとんどの調査項目において平日に大きな違いが見られたことから、対面授業再開は平日の活動実態や生活習慣に影響を与えていたと考えられる。【結論】22年度（対面授業再開後）の活動実態と生活習慣は、21年度と異なっていた。

研究報告 9_12:45-13:02 (3/14)

学生主体の協同型学習は、運動パフォーマンスを向上させるか

佐藤 和

千葉工業大学創造工学部

キーワード: 社会人基礎力, 投球パフォーマンス, 球速, 回転数

【背景と目的】近年の大学教養体育は、スポーツ活動を教材とし、科学的視点や課題設定・解決能力の獲得などを重視する考えが普及してきた。また、経済産業省は、職場や地域社会での多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として「社会人基礎力」を提唱し、大学教育にもその要請が高まっている。このような背景から、近年、大学体育授業にはチーム基盤型学習や問題解決能力養成型学習といった協同型学習が積極的に取り入れられ、教養体育受講後の社会人基礎力向上を報告している。一方で、スポーツ活動の根底のひとつには、運動技能の習得が必要であるとの考えも存在するが、学生主体の協同型学習によって運動パフォーマンスが向上するかについて疑問が残る。そこで本研究は、協同型学習形態によって運動パフォーマンスが向上するか否かについて調査することを目的とした。【方法】C大学の教養体育授業であるスポーツ科学（ソフトボール）受講生（50名）を対象に、協同型学習の教育効果指標として社会人基礎力を、運動パフォーマンスの指標には投球パフォーマンス（投球速度と回転数）を採用し、受講前後で比較、検討した。【結果と考察】教育効果指標である社会人基礎力は、社会人基礎力得点、3能力（アクション、シンキング、チームワーク）得点、発信力およびストレスコントロール力を除く10能力要素得点においてポスト調査得点がプレ調査得点にくらべて有意に高値を示した。また、運動パフォーマンスの指標である投球速度および回転数もポスト測定値がプレ測定値にくらべて有意に高値を示した。これらの結果より、学生主体の協同型学習形態授業は、社会人基礎力のみならず運動パフォーマンスの向上も期待できることが示唆された。

研究報告 10_13:05-13:22 (3/14)

剣道の授業における「学びの深化」を促す授業実践の研究

高瀬武志

桐蔭横浜大学法学部

キーワード：武士道, アクティブラーニング, 個の学習, 協働学習, 質的研究

【目的】大学生の体育実技科目である剣道の授業において剣道未経験である学習者が「アクティブラーニング」を取り入れた授業の中で「学びの深化」を促すためには、どのような要因が挙げられるかを明確にすることを本研究の目的とした。【方法】剣道の授業を開講するA大学（スポーツ健康政策学部・33名）とB大学（教育学部・28名）の授業履修者を対象とする。アクティブラーニング型授業を実践しつつ毎回の授業の中で剣道の所作・技術の解説や指導に加えて所作・技術の土台としてある「武士道」の伝統を積極的に解説と指導を施したA大学とそうでないB大学の学習者の「学びの深化」を比較する。学習者の作成した自身の学びについて振り返るレポートの記述とレポートの記述を通して「学びの深化」を得られている学習者にインタビュー調査を実施し、「学びの深化」を促した要因は何であったかを質的研究の手法で探る。【結果及び結論】剣道未経験者を主な対象とする剣道の授業の中で、学習課題である所作や技術の解説と指導の重要性は当然である。しかし、それだけでは所作や技術の理解や習得については一定の到達度は得られるが学習者の「学びの深化」は乏しい。所作や技術の解説と指導の際に積極的に「武士道」の伝統と絡めて解説や指導を施すことによって学習者の得る学びの中に学習課題である所作や技術の習得に加えて、文化性や精神性についても考察が及んでいることから「学びの深化」は豊富なものになっていることが明らかであった。ここに「学びの深化」を促す一因があると考えられる。【注】本研究は2022年度潮田記念基金による慶應義塾博士課程学生研究支援プログラムの研究補助を受けて実施しています。

研究報告 11_13:25-13:42 (3/14)

ライフスキル獲得による体育実技授業受講生の類型化とその特徴

陳昱龍, 前田奎, 成相美紀, 梶田和宏, 吉中康子

京都先端科学大学健康医療学部健康スポーツ学科

キーワード：大学体育, 大学生, 「日常生活スキル尺度」（大学生版）

【背景と目的】本研究は、京都先端科学大学の「Sports Life Skills: SLS」科目の受講生のライフスキル（以下はLSと略す）獲得の類型化とその特徴について把握することを目的とする。【方法】2022年8月に同科目のパドミントンとニュースポーツを受講した大学生164名（その内有効回答：104名、M:80名、F:24名）を対象としたアンケート調査（①大学生の属性②LSを測る尺度が構成されている）を実施し、統計分析を行った。【結果と考察】まずは性別によるLS獲得レベルの比較において性別間に有意差が認められなかった。その背景にあるのは、コロナ感染拡大防止のため、2022年度もオンデマンドと対面授業が交互に行われるようになっている。SLSでは対面時のクラスの人数が少ない場合、より担当教員の周到的な指導の影響が高くなるものと推測され、全ての受講生に丁寧な配慮や即時的なフォローなどが行われたりすることで、今回の結果に繋がったのではないかと考えられる。次にSLSを受講する大学生はLS獲得の特徴をもとにそれぞれ3つずつのタイプに分類された。すなわち、1年生は「①利他タイプ」、「②自信ロスタイプ」、「③前進タイプ」で、2年生は「①消極タイプ」、「②一様タイプ」、「③前進タイプ」であった。また、1年生における「①利他タイプ」と「③前進タイプ」によって構成されている受講生の割合は、全体の82.5%で、2年生における「②一様タイプ」と「③前進タイプ」によって構成されている受講生は、68.3%を占めており、それぞれにLS獲得のレベルが高い傾向にあった。SLSを通して、自分自身のもつLSをアップデートし、今後の勉強生活においても、各種スキルを発揮し日常生活の中で生じる様々な問題や要求にうまく適応できる可能性を秘めていることが推察される。【結論】今後のSLS授業展開について、「1年生と2年生のLS獲得の特徴が異なる」ということを理解したうえで、複合的かつ総合的なアプローチを模索していくことが必要だろう。

事例報告 4_13:55-14:12 (3/14)

足元から見直す大学生の健康づくり，動きづくり：

接地足蹠形態および歩容の特徴と，改善に向けた草履サンダル導入の事例報告

宮口和義¹，畝本紗斗子²

¹石川県立大学教養教育センター，²金沢工業大学基礎教育部

キーワード：浮き趾，歩幅，推進力，履物

【背景と目的】立位時に足趾が接地していない“浮き趾”が増加している。浮き趾は足趾把持力の低下や重心前方移動能力の低下などの機能不全を引き起こすとされ，改善すべき身体現象といわれている。しかし，その歩容に及ぼす影響について論じている報告は少なく，対処法も十分明らかにされていない。本発表では大学生を対象にした足圧分布測定および歩容解析の結果を示すとともに，草履サンダルを用いた日常での導入効果について紹介する。

【方法】一般学生 140 名および女子学生アスリート（サッカー，陸上競技）60 名を対象に「フットビュークリニック（ニッタ社製）」を用いて足圧分布測定を行うとともに，歩容解析デバイス「AYUMI EYE（早稲田エルダリーヘルス事業団）」による測定を行った。また，歩容得点の低かった一般学生の一部と女子アスリート学生にオリジナルで開発した草履サンダル「武王（ラッキーベル社）」を渡し，日常生活で活用してもらった。このサンダルは立位時および歩行時に，必然的に前足部に荷重ししやすい形状となっている。3 カ月後に再測定を行った。【結果と考察】一般学生の接地足蹠形態をみると，浮き趾傾向の者が全体の 8 割を占めており，約 4 割の者は足趾の僅か一部しか接地していなかった。また，前足部に対する踵部の足幅は 57%以下が望ましいとされているが，基準に達しているのは 10.7%であり，細長い足蹠の者が多かった。歩容結果については，アスリートも含め推進力得点（前に進む力を表す）の低い学生が多かった。草履サンダル導入 3 カ月後に再測定を行った結果，浮き趾の改善傾向が認められ，足圧中心も前方に変位していた。歩容については歩幅が伸び，歩行速度も上がり結果的に推進力得点も高くなっていた。【結論】草履サンダルを履くことで足趾が使えるようになり，駆動力を効率良く床面に伝達できるようになったと思われる。

事例報告 5_14:15-14:32 (3/14)

コロナ禍における体育（ダンス）授業の展開と検討：

事例からみる実技として成り立たせるための工夫

飯田路佳¹，田中安理²，多田五月³，川上美里³，清水文子¹

¹十文字学園女子大学，²常葉大学，³帝京大学

キーワード：授業方法，対面，遠隔，動画配信，身体表現

【背景と目的】2020 年度前期よりコロナ禍における大学体育の授業展開は各大学でも混迷を極めた。3 年経た現在それらを振り返りどのように切り抜けたかについて，A, B, C, D の 4 大学における 2020 年度，2021 年度の授業展開を各担当者により振り返り検討することを目的とした。【方法】各担当者が行った授業形式や内容，授業の成果物およびリアクションペーパーを持ち寄り，研究者のトライアンギュレーションの手法を参考に用いて検討した。【結果】1) 開催期ごとの開催方法について 2) 実技として成り立たせる工夫 3) グループワークを成り立たせるために駆使したネットワーク環境 4) 学生の反応という主に 4 つの視点から分析を行った。その結果，2020 年度は前後期ともオンラインを駆使して対応していた。その内容としては双方向の遠隔授業が可能な大学とオンデマンドで対応している大学とに別れた。主にオンデマンドで対応していた大学は，翌年対面授業に切り替えるタイミングが早く，また 15 コマのうちの対面授業数も多いことがわかった。また，双方向の遠隔授業が可能な大学では，その環境の中でもグループワークを成立させるための工夫がみられていた。例として，Zoom のブレイクアウトセッションを利用しながら，Microsoft OneDrive に保存している PPT の作業を並行で行うことや，Google Jamboard を利用することなどがみられた。オンデマンドでは，PDF で課題を与えると同時に YouTube を利用して動画を配信することで実技として成立させる等，各大学の環境により，工夫は異なっていた。【結論】授業の方法としては，対面が不可能だった際にも実技として成り立たせるための様々な工夫をしていることがわかった。今回コロナ禍に使用した技術を，今後に向けてより効果的な授業方法を開発する余地があるのではないかと可能性がみえてきた。

事例報告 6_14:35-14:52 (3/14)

芸術大学の特性をふまえた健康教育の実践

岸本栄嗣

京都芸術大学芸術教養センター

キーワード：芸術，健康，教養教育

【背景と目的】芸術大学での学生の制作・研究は，拘束姿勢や大量の VDT 作業など，身体的に負荷のかかる活動が少なくない．放置すればさまざまな不調につながる事が予想される．制作・研究もさることながら，日常生活や卒業後の心身の健康状態にも影響を及ぼしかねない．こうした問題は従来，労働衛生分野で取り上げられてきたが，とくにそうした作業や活動と密接な芸術大学教育現場においては看過すべきではないだろう．そうした問題意識のもと，学生の普段の制作・研究・学習時の姿勢・動作を見つめ直し，セルフケアを促すことを意図した授業を試みたので報告する．【結果と考察】筆者の担当科目（教養科目）である「現代ヘルスケア論」（講義／オンライン）では，課題の一つとして，受講生の普段の制作・研究・学習時の姿勢・動作を撮影（写真）し，それをもとに報告をまとめることを求めた．それらのうち筆者が選択したものを教材として授業内で使用し，解説や助言を行った．シラバスで示した授業内容「ストレッチ」，「（筋力）トレーニング」，「メンタルヘルス」などについては，受講生の報告内容（＝学生の日常）と関連付けて指導した．授業後のアンケートでは，「ストレッチに関する知識」，「ストレッチの実践」，「姿勢に関する知識」への評価が高かった．また，本科目受講後，受講生の運動に対する意識，行動（運動機会）がともに向上する傾向にあったことが明らかになった．この意識と行動の変容は，普段の制作・研究・学習時の姿勢・動作を自ら客観視し，そこに実行可能な知識や方法を関係づけたことで促されたのではないかと考察された．

「大学体育スポーツ学研究」投稿規定

- 1. 本誌の名称：** 本誌の名称を、「大学体育スポーツ学研究（Japanese Journal of Physical Education and Sport for Higher Education）」とする。本誌は、公益社団法人^{*}¹全国大学体育連合（以下「この法人」という）が2003年～2018年に刊行した「大学体育学」を引き継ぐものである。
*1：2011年12月までは社団法人全国大学体育連合。
- 2. 本誌の目的：** 本誌は、高等教育機関で行われる体育およびスポーツ（以下「大学体育スポーツ」という）における教育活動の発展を目的に、この法人が発行する学術雑誌である。競技力向上に関する基礎科学的な研究は、本誌の範疇に含まれない。
- 3. 投稿資格：** 本誌には、この法人の会員と非会員を問わず、論文を投稿することができる。ただし、投稿料および掲載料については、19項に定めるとおりとする。本誌編集委員会（以下「本委員会」という）は、論文投稿を依頼することができる。
- 4. 投稿可能な原稿：** 投稿論文は完結した未発表のものであり、他誌へ投稿中でないものに限る。ただし、学会発表抄録や科研費等の研究報告書の内容を充実させた論文、各種研究助成金の交付を受けた研究をまとめた論文、発表済みの結果であっても新たな観点から再考察した論文は、投稿することができる。
- 5. 投稿論文の種類：** 表1のとおりとする。

表1 投稿論文の種類、内容、制限頁数

論文の種類	内容	制限頁数 ^{*2}
総説 Review	大学体育スポーツに関する特定の内容や主題について、関連文献や資料に基づいて総括的に論評した論文	12頁
原著 Original Research	大学体育スポーツの発展に寄与しうる研究論文で、高い独創性と学術性を備えたもの	10頁
研究ノート Research Note	原著に求められる独創性と学術性の水準に満たないもの、大学体育スポーツの発展に寄与しうる知見や取組等をまとめた報告や資料	8頁
フォーラム報告 Forum Report	大学体育スポーツ研究フォーラムで発表した内容（一般発表、ラウンドテーブル、ワークショップ、特別講演など）の抄録	1頁
その他 Miscellaneous	編集委員会からの依頼原稿や、他国の言語で掲載された論文の二次出版論文など	特に定めない

^{*2}：図表等を含めた刷り上がり頁数（文字のみの場合の1頁は約2,300字）

- 6. 原稿の書式：** 原稿は、図表も含めて1つのWordファイルにまとめたものとそのPDFファイルの両方で提出することとする。書式はA4版縦置き・横書きで全角40字×30行、余白は上下左右35mm、フォントは明朝体10.5ポイント、英数字はすべて半角とする。表紙、抄録、本文までの通し頁番号を各頁のフッター中央部に、各頁にも1から始まる行番号を左余白に、それぞれ付すものとする。
- 7. 原稿の使用言語：** 投稿原稿における使用言語は、日本語または英語とする。
- 8. 原稿の構成：** 表2のとおりとする。
- 9. 抄録：** 和文論文には英文抄録を、英文論文には日本語抄録をつける。抄録はネイティブ・スピーカーのチェックを受けたものとする。

表2 投稿原稿の構成と順序

項目	内容
表紙	表題 簡潔かつ明瞭なもの。副題をつける場合はコロン（：）で続ける（和英両方）
	ランニングタイトル 25字以内
	論文の種類 表1から適切なものを選択
	図表の数 図と表それぞれの数を記載
	文字数 本文、文献、注の合計文字数
抄録とキーワード	200-300語の英文抄録（改行なし）と500-700字の和訳文、和英3-5語のキーワード 英文抄録は受理が決定した後に提出することも可
本文	（「原著 Original Research」は以下の構成で、他の種類の原稿はこれに準じた形式で、それぞれ執筆する）
緒言	先行研究との関連から、研究の目的と必要性を述べる。「問題と目的」「はじめに」なども可
方法	研究の妥当性・信頼性の評価ができるように、研究方法を具体的に述べる
結果	目的と方法に沿って得られた結果を要約し、考察や結論の論拠を示す
考察	結果の評価と解釈を述べる
結論	省略可。「まとめ」「要約」なども可
注	必要な場合は記載する
付記、謝辞	論文受理後に追記する
文献	「10. 文献リスト」に従い、著者名のアルファベット順に一括する
図表	フォントは明朝体とする。本文頁の右横の空白に、図表等の挿入箇所を指示する 表の罫線は必要な横罫線だけに留め、縦罫線は使用しない。縦罫線のかわりに十分な空白を置く

- 10. 文献リストおよび本文中での文献記載：** 文献リストは、著者名のアルファベット順に並べ、本文の後に一括する。雑誌名は和洋ともに略記しない。文献リストおよび本文中の文献記載方法は、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会発行の「体育学研究」投稿の手引き（最新版）を参照する。
- 11. 研究参加者の取り扱い：** 人を対象とする研究遂行に際して、研究対象者の人権尊重や社会的影響等について配慮した点を論文中に明記する。研究倫理については、一般社団法人日本体育学会研究倫理綱領（最新版）を参照する。
- 12. 投稿原稿返却の例：** 以上2～11に従わない原稿（本誌の目的に沿わないもの、書式に著しい不備あるもの）や水準の著しく低い原稿については、本委員会の判断により、審査を行わない場合がある。
- 13. 投稿原稿の提出方法：** 原稿は、この法人の事務局（info@daitairen.or.jp）宛てに、件名を【大学体育スポーツ学研究への投稿論文】としたEメールの添付書類として投稿する。その際、以下8項目【（1）著者名（和英、著者全員）、（2）所属機関名（和英、著者全員）、（3）代表著者の氏名・電話番号・e-mail アドレス、（4）表題、（5）ランニングタイトル、（6）論文の種類、（7）和文抄録、（8）和文キーワード】をEメール本文として同時に送信する。また、本連合ホームページに掲載されている「投稿時チェックリスト」へ必要事項を記入のうえ、添付書類とあわせて提出する。
- 14. 論文投稿の締切日：** 論文投稿は随時受け付ける。投稿後、審査を経て論文掲載可（受理）となるまでは、通常、最低3ヶ月を要する。
- 15. 再提出の期限：** 本委員会より訂正を求められた投稿原稿の再提出期限は、訂正通知日から原則28日以内とする。また、再々提出期限は、訂正通知日から原則14日以内とする。なお、特別な事情なくして提出の期限を1ヶ月以上超えた場合は新規投稿原稿として審査を行う。

16. **投稿論文の採否：** 本誌編集委員会（以下「本委員会」という）が投稿論文の採否、加除訂正の要求、校正（著者校正は最大2回）などを行い、著者へ連絡する。投稿論文は、査読意見に基づき掲載の採否を決定する。査読の制限回数を原則3回までとする。
17. **論文受理証明書の発行：** 本委員会により掲載承認された受理論文については、著者の希望により論文受理証明書の発行を行う。
18. **論文公刊の時期：** 原則として1月末までに掲載承認された受理論文は、同年3月にこの法人のホームページおよびJ-STAGE上でPDFファイルとして公開される。なお、論文掲載可となった論文原稿は、版組完了後、本連合ホームページ等に早期公開論文として掲載される。
19. **投稿料および掲載料：** 著者全員がこの法人の会員の場合は、投稿料・掲載料ともに無料とする。著者に非会員が含まれる場合は論文1編につき1万円の投稿料を、掲載料については刷り上がり1頁あたり3千円を、投稿者が負担する。表1に示す制限頁数超過の場合は、会員・非会員を問わず、1頁につき3千円を投稿者が負担する。なお、本誌では、会員校の大学院生を会員と同様の扱いとする。
20. **論文の著作権：** 本誌に掲載された論文の著作権の一切（著作権法第27条及び第28条の権利を含む）は、この法人に帰属または譲渡されるものとする。ただし、論文の内容に関する責任は当該論文の著者が負う。
21. **各大学等の機関リポジトリコンテンツ登録に係る著作権：** 本誌掲載論文を著者の所属する大学等の機関リポジトリへ登録するために、本誌では著作権のうち複製権および公衆送信権の行使を各機関（の附属図書館）に対して認める。
22. **本規定の改廃：** 常務理事会にて行う。

附則

- 本規定は、平成15年6月14日より適用する。
本規定は、平成18年4月1日より適用する。
本規定は、平成20年9月19日より適用する。
本規定は、平成24年2月6日より適用する。
本規定は、平成25年7月26日より適用する。
本規定は、平成27年5月29日より適用する。
本規定は、平成29年2月21日より適用する。
本規定は、平成30年5月18日より適用する。
本規定は、平成31年2月7日より適用する。
本規定は、令和3年2月9日より適用する。
本規定は、令和4年2月10日より適用する。

「大学体育スポーツ学研究」投稿時チェックリスト

(2020年4月1日策定, 2021年3月31日改訂, 2022年2月10日改訂, 2023年3月10日改訂)

< 投稿にあたって >

- 投稿論文は、高等教育機関での体育およびスポーツにおける教育活動の発展を目的とした内容であり、競技力向上に関する基礎科学的な研究には該当しない。
- 投稿時点で、著者全員が公益社団法人全国大学体育連合（以下、この法人）の会員である。
 - 非会員が含まれる場合、投稿論文1編につき1万円の投稿料を納入した。
納入方法は、この法人事務局（info@daitairen.or.jp）にお問い合わせください。
すでに会員であるにも関わらず投稿料を誤って入金した場合や、投稿料不要の会員校大学院生が投稿料を誤って入金した場合、返金いたしませんのでご注意ください。
- 投稿論文は完結した未発表の内容で、本誌や他誌に掲載済や印刷中もしくは他誌へ投稿中ではない。
- 原稿提出にあたり、図表も含めたWordファイルとそのPDFファイルの両方を準備した。
- Eメールによる原稿提出方法（件名、著者名等の8項目、宛先）を確認した。
- 和文論文には英文抄録をつけ、ネイティブ・スピーカーから校正を受けた（受理決定後の提出も可）。
- 投稿者名や所属先等が判明しないよう、イニシャル等（記載例：A大学の倫理）でブラインドした。

「表紙」は、以下のとおり記載した。

- 25字以内のランニングタイトル
- 論文の種類（投稿規定を確認し、適切な論文種類、内容、制限頁数とした）
- 図と表それぞれの数および本文、文献、注の合計文字数
- 200～300語の英文抄録（改行なし）と500～700字の和訳文（英文抄録は受理が決定した後に提出することも可）
- 和英3～5語のキーワード（表題と重複しない語とした）

「本文」は、以下のとおり記載した。

- A4版縦置き・横書きで全角40字×30行、余白は上下左右35mmとした。
- フォントは明朝体10.5ポイント、英数字は半角とした。
- 図表は明朝体で作成し、本文頁の右側余白に図表等の挿入箇所を指示した。
- 表の罫線は必要な横罫線だけに留め、縦罫線は使用せずに作成した。
- 図表（タイトル中央配置）は直ちに印刷できるよう、適度な大きさと鮮明に作成した。
- 研究対象者の人権尊重や社会的影響等について配慮した点を投稿論文中に明記した。
- 投稿規定に従って、文献リスト（著者名のアルファベット順；雑誌名は略記しない等）と本文中の文献を記載した。8名以上の著者の場合には、第1～6著者…最終著者と記載した。
- 句読点は「，」と「．」にした。
- 統計的概念の記号（M, SD, n, t等）はイタリック体にした。
- 各頁には、1から始まる行番号を左余白に記載した。

< その他 >

- 表紙～本文までの通し頁番号を各頁のフッター中央部に記載した。
- 掲載承認された場合、この法人のHPに早期公開となることを承認した。

上記の点および投稿規定をすべて確認し、投稿原稿を作成しました。

西暦 _____ 年 _____ 月 _____ 日

氏 名 : _____

第 11 回大学体育スポーツ研究フォーラム
2022（令和 4）年度春期研修会
「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」
発表プログラム・抄録集

2023（令和 5）年 3 月 10 日発行

発行： 公益社団法人全国大学体育連合（JAUPES）

運営委員長 田原亮二

副運営委員長 中山正剛

編集：

委員 藤野和樹

委員 梶田和宏

Printed in Japan